

まのだい ふるやしき 間野台・古屋敷遺跡C地区

－発掘された幻の屋敷跡－

嘱託調査研究員 仲村元宏

遺跡の立地と過去の調査成果

現在の京成臼井駅の辺りにある鹿島川と手繰川に挟まれた台地は、古代から連綿と続く人々の生活の痕跡が、濃密に残っている地域であり、中世とよばれる鎌倉時代、室町時代の遺跡も多く見つかった。

調査が行われた主なものだけでも、北側の印旛沼のほとりには、中世を通じて臼井氏、16世紀中頃の臼井氏滅亡後は、原氏の居城として使われた臼井城跡がある。そして臼井城の南東にある吉見には、当センターにおいて数次にわたる調査が行われ、土塁に囲まれた主郭部や台地整形区画、及びそれに伴う地下式坑などが見つかった臼井屋敷跡遺跡が存在する。臼井屋敷跡遺跡は、12世紀から15世紀にかけての臼井氏に關係する屋敷跡と考えられている。また、手繰川に近い臼井南遺跡群中の石神第Ⅰ地点では、中世の土坑墓が90基以上見つかり、古銭、かわらけなどととも、16世紀以降の板碑が6枚出土している。

今回、報告する間野台・古屋敷遺跡は佐倉市臼井字間野台に所在し、印旛沼の南岸、標高27mほどの台地上に立地している。遺跡のある辺りは住宅地から外れ、周囲には畑が広がり、その中に家が点在している環境にある。

過去、昭和50年に臼井中学校建設に伴って、谷を挟んで存在した2つの遺跡を、それぞれ間野台遺跡、古屋敷遺跡として発掘調査が行われた。間野台遺跡からは弥生時代及び古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての堅穴住居跡、中世の地下式坑などが見つかった。

また、古屋敷遺跡は、間野台遺跡と同様に、弥生時代及び古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて

の堅穴住居跡のほか、中世の地下式坑、井戸、溝状遺構、土葬や火葬が行われた墓坑等の遺構を検出している。特に中世の墓坑は大きく2群に分かれ、遺跡のある台地の中央部にあった第2土坑墓群から、20枚の板碑が出土している。その中には、「弘安七年(1284年)」「正和(1312～1317年)」「嘉暦三年(1328年)十月」「延文カ(1356～1361年)」「文明(1469～1487年)」といった13世紀後半から15世紀にかけての紀年銘が刻まれたものがあり、身分の高い人達の墓域であったと考えられている。

調査の概要と成果

(概要と粘土採掘坑)

今回の調査は、古屋敷遺跡の南側、臼井中学校の敷地に隣接した部分3,141m²を対象に、平成20年4月から6月にかけて行われた。調査の結果、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、奈良時代の堅穴住居跡2軒などととも、土器等を作るための粘土を採っていた粘土採掘坑や、中世の遺構を検出している。

粘土採掘坑は、関東ローム層の地山より約2m下層にある、常総粘土層から、白色粘土を採掘するために掘られた穴である。直径2～3m程の堅穴を粘土層まで掘り、使用目的にかなった良質な粘土だけを採掘し、運び出していたと見られる。調査区の南側の台地縁辺部を中心に、採掘が行われた穴の跡が無数に見つかり、その範囲は、今回の調査区の3分の1の広さに達している。粘土の採掘が行われた時代については、出土遺物が非常に少ないため確定的なことはいえないが、採掘が行われなくなった後の場所に、8世紀の堅穴住居跡がみつまっている点から、少なくとも奈良時代以前のものであると考えられる。

(中世の遺構・遺物)

中世の遺構は、台地整形区画2カ所、土坑34基、井戸6基、地下式坑8基、溝3条、掘立柱建物跡9棟などが検出された。

台地整形区画とは、傾斜地に建物を建てる際、地山を削って平らな面をつくり、建物を建て易くした造成の跡である。1号台地整形区画は、調査区の南側、台地縁辺部で検出している。規模は、東西20m、南北12m程で、深いところで40cmほど削られている様子が確認できた。2号台地整形区画は、調査区の西端で検出し、今回の調査区域の外側まで広がっている。中心はさらに西側の部分であろう。規模は南北で20mである。いずれの台地整形区画内からも無数の柱穴が見つかり、掘立柱建物や、柵のようなものがつくられていたと見られる。また台地整形区画に伴うように井戸、地下式坑、土坑なども見つっている。

6基見つっている井戸には、直径1～2m程で垂直に落ち込んでいるものと、直径2～4mほどあり、大きく播鉢状に開いているものの2つの形態がある。

地下式坑は、天井を持ち、壁穴から中に入り込む地下室のような施設である。用途としては、物の貯蔵やお墓に使われていたとされる。規模としては1辺2～4m程、深さは2mほどある。どの地下式坑も天井は崩れた状態で見つっている。

30基以上見つっている土坑の中には、底や壁に白色粘土を貼り付けたものがある。形は長方形や正方形をしており、一辺は約1～2m程度。粘土が貼ってあるため、水が地面に浸透しにくく、貯水に使われていたと考えられる。

最後に遺物について見ていくと、今回の調査において中世の遺物の総量は比較的少なく、破片で見つかることがほとんどである。そのような中で、在地産と見られる内耳土鍋やかわらけ、常滑産の播鉢や瀬戸・美濃産の灰釉の碗など以外にも、貿易陶磁とよばれる青白磁の梅瓶めいびんや青磁の碗、皿といった、中国などの国外からからもたらされたものが出土している。陶磁器類は15世紀後半のものが主体となっ

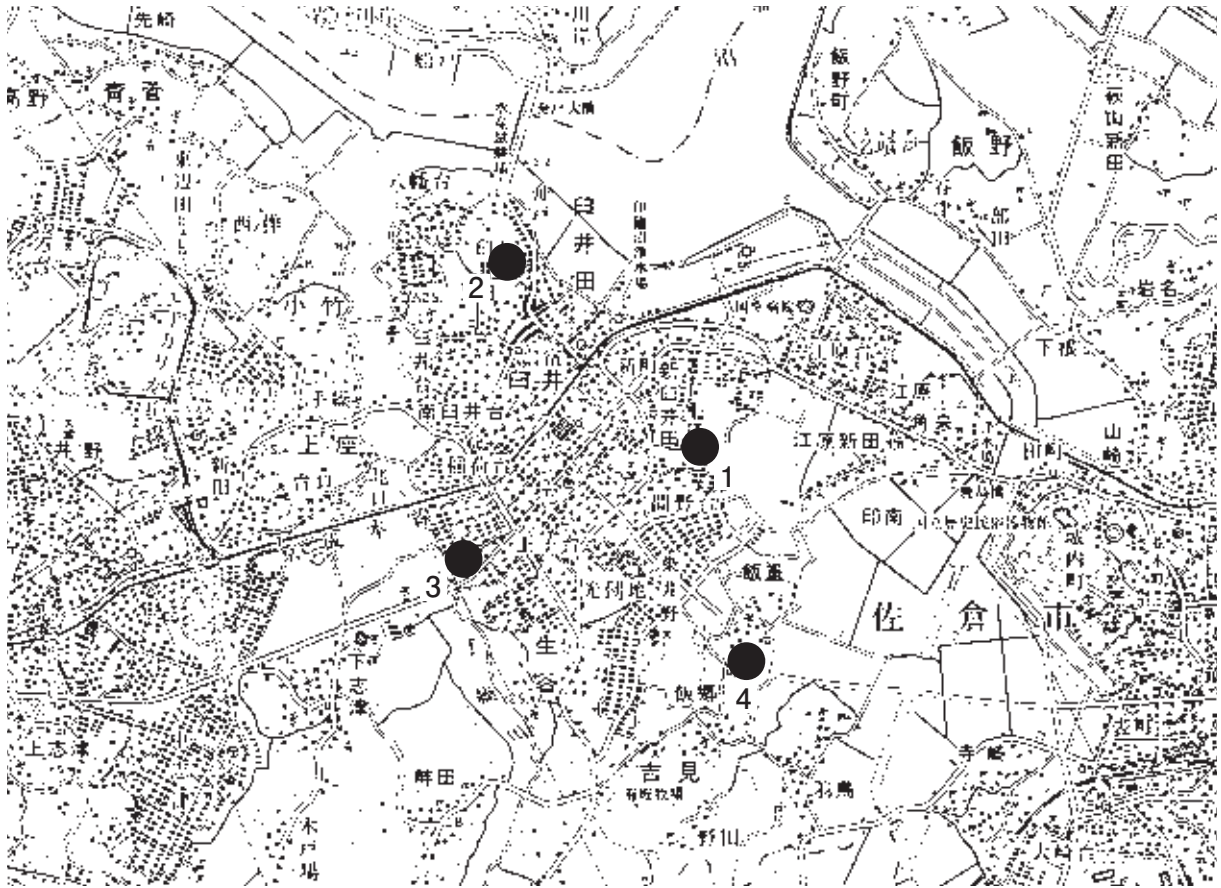
ている。

青白磁とは白磁の一種であり、釉薬が青みを帯びた美しい水色に見えるものをいう。宋代以降、有名な焼物の産地として知られる景德鎮けいとくちんをふくむ、中国の南部でつくられたものとみられる。また梅瓶とは細い竹節状の口を持ち、肩が張り、裾に向かってすぼんでいく瓶のことをいい、宴席などで酒を入れるのに使われた。

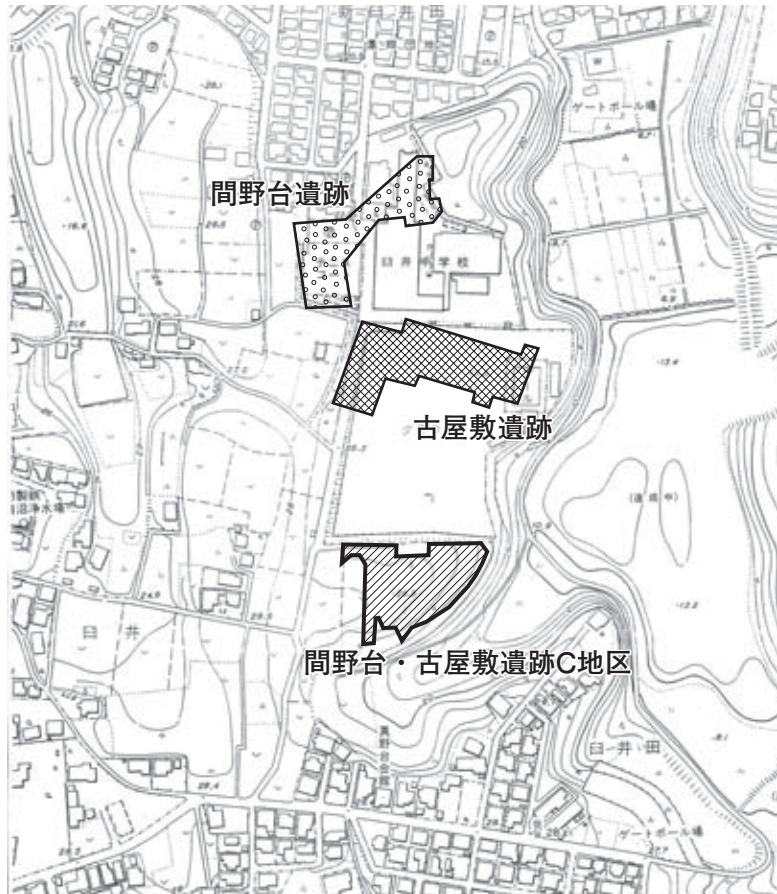
まとめ

遺跡のある場所は、現在の地名には残っていないが、江戸時代後期である1855年頃につくられた地誌『利根川図志』の中にある、「白井古城図」に「字古屋敷」と記されており、何らかの屋敷跡があったことを伝えている。今回の調査で検出した2カ所の台地整形区画と、それに伴う掘立柱建物跡、井戸、地下式坑、土坑、溝、そして出土している陶磁器類などから、地名にあった屋敷が今回調査の場所一帯にあったと見て間違いないだろう。また、一般の人々では手に入らない、青白磁や青磁などの貿易陶磁が出土している点から、屋敷の主として、古屋敷遺跡の墓域と同様に、白井氏と何らかの係わりを持つ身分の高い人達の存在を窺わせる。

出土した陶磁器類の主な時代である15世紀後半は、1454年に鎌倉公方、足利成氏なりうじによって関東管領、上杉憲忠のりただが暗殺された事に端を発する享徳きやうとくの乱、1467年に京で応仁の乱などが起こり、関東を含めた全国規模で戦乱の時代を迎えつつある時期であった。また白井城も文明11年(1479年)、太田道灌どうかんの弟太田資忠すけただらによって攻め落とされている。そのような時代の中、この屋敷がどのような役目を担ったのか、白井城跡や白井屋敷跡遺跡など周辺の同時代の遺跡や、古屋敷遺跡で見つかった墓坑群との関係などを含めて、今後検討していく必要があるだろう。

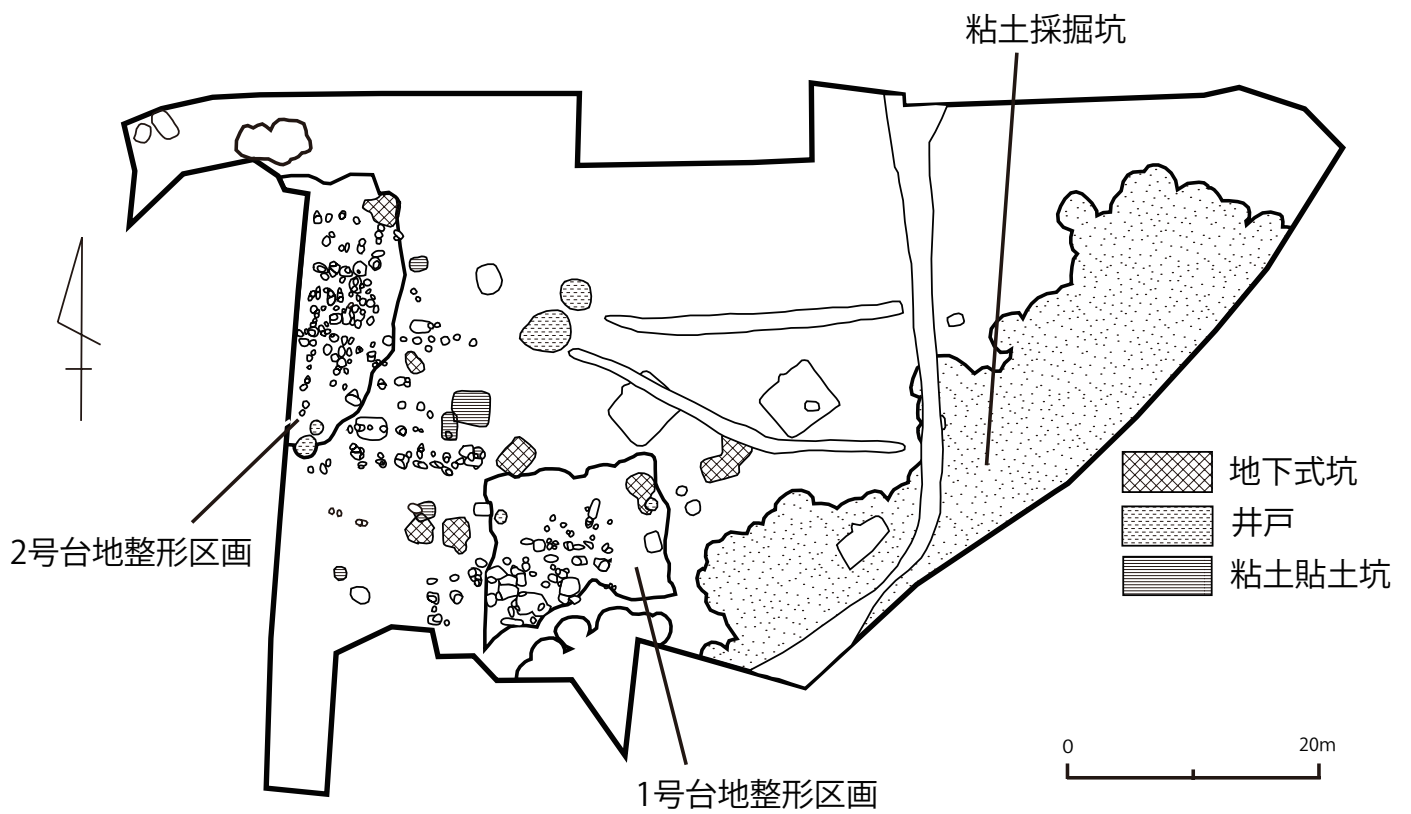


第1図 遺跡の位置と中世の遺跡 (S=1/5,000)



1. 間野台・古屋敷遺跡
2. 白井城跡
3. 白井南遺跡石神第I地点
4. 白井屋敷跡遺跡

第2図
遺跡周辺の地形図 (S=1/5,000)



第3図 遺構配置図 (S=1/600)



調査区 空撮



1号台地整形区画



播鉢状の井戸



地下式坑